

平成28年度 第3回 日立市立学校適正配置検討委員会 会議録

日 時	平成28年12月19日（月） 午後2時から4時まで
場 所	消防拠点施設 講堂
出席人数	(1) 委員 24人（1人欠席） (2) 事務局 教育部長、学務課課長、適正配置推進室職員 計28人
議 事	学校視察を踏まえた意見交換 (第2回検討委員会で宮田小学校、助川中学校を視察)
そ の 他	(1) 新委員紹介 (2) 次回開催予定 平成29年2月下旬
協議内容	<p>(委員長) 本日は、学校視察を踏まえた意見交換、情報の共有をしたいと考えている。</p> <p>(A委員) 宮田小は市街地の学校なので狭い。古い学校ほど人を集めるのは難しい。統廃合となると、合理的な理由、納得できる環境が整わないとまとまって行かない。数校をまとめて、周囲の同意を得ながら行う。市として思い切って小中一貫としてまとめてはどうかと考えた。</p> <p>(B委員) 宮田小学校の3年生の教室は狭い（37人）。助川中学校の環境はきれいで羨ましいと思った。</p> <p>(C委員) 望ましい学校規模という視点で考えたことがなかった。他校を見て、考える良い機会になった。30人以上いても特に支障はないし、(自分の)子どもたちも人が多いから嫌だといったことはない。(自分の学区の)小学校は人数が多いが、先生方がよく見てくれていて、個性的な子どもたちもたくさんいるが、支障を感じていないし、適正ではないとは思わない。今回の視察を通して、25～30人位がよく見てもらえる適度な人数かなと感じた。他校の保護者から、「〇〇小の運動会は迫力がある」と言われる。この検討委員会(のテーマ)は、難しい問題だと感じる。</p> <p>(D委員) 自分としての結論は出せない問題である。視察を通して、(自分の地区)はこのままでいいという思いを強くした。一括りの数字ではなく地区にあった数字で考えてもいいのではないか。 大人数が苦手な子どももいる。ちょっとした逃げ場も欲しい。(自分の)長男が不登校だった(逆に人数が少なくて逃げ場がなかった)。全部が</p>

同じ規模になってしまったら、そのような子はどこに行けばいいのかと感じた。

(E 委員)

小学校では、早く終わってしまった子が手持無沙汰にしていた。時間ももったいなかった。人数の多い学級などは、参観日など保護者が教室に入りきれないのではないかと。中学校では、掲示物などからも学級の団結力を感じたので、適正な人数なのだと思った（助川中は全学級 30 人以下）し、やはり適正な規模は大事だなと感じた。

(F 委員)

宮田小は校舎が古く、トイレなどは低学年の児童は使いにくいのではないかと。震災を経験している子どもたちなので、明るい雰囲気の方がいい。

1 年ごとにクラス替えをすることで人間関係を深められ、保護者の交流や子どもたちの友達関係もできてくる。3 クラスはあった方がいい。（宮田小は全学年 2 学級）

低学年は人数が多い方が学校生活に慣れることができると思う。高学年は授業が難しくなったり友達関係も出てくるから 20～30 人位がいい。

(G 委員)

もう少し人数の多い中学校を見たかった。学校の先生方の心配りを感じた。

地域の観点からは、昔から小学校と地域は関わりが強かったし、小学校を中心とした地域づくりは大切なことで、外せない。地域との連携を考慮した統廃合、適正配置を考えていかなければならない。地域との連携も重要な要素である。

(H 委員)

（前任者が）各地で義務教育学校ができているが、日立市でも設置を検討してはどうかと提案したかったと言っておられた。

自分の教員の経験からは、それぞれの規模による良さも問題点もあった。地域に合った規模もあると思う。地域に合った学校なら無理に統廃合することはないと思う。

(I 委員)

人権擁護委員として学校で出前授業をした経験から、小さい学校もいいと思う。授業を理解してもらえていると実感できる。助川中は落ち着いていて適正な規模だったと思う。一律に人数で考えるのは割り切れないと感じた。

(J 委員)

小学校は子どもが勉強の楽しさを覚えていくところ。規模としては目が届く範囲。中学校は、自分で考えることができる、分からないところだけ教えてやればよい年代。

小学区とコミュニティが密接に関わることが重要。特に防犯、防災の面からも小学校は地域と密接な関係にある。中学校になると学区が分かれて

地域と離れてしまい、中学校と地域が密接に関係づけられない。子どもを守る立場から、地域の老人が気軽に学校へ行ける。地域のお年寄りが気軽に学校に行けるのはコミュニティがあるから。地域力なくしては、子どもは守れないし教育はできない。学校は地域と離れては運営できない。

(K委員)

今の子どもたちは幸せだと思った（自分たちの時は人数が多かった）。

スポーツ少年団は、競技スポーツを教えるというより、社会性を身につけるとして活動している。学校の中でも子ども同士、先輩との縦のつながりなどができるような教育をするのがいいのかな（と思う）。一番大事なのは、（将来、子どもが）一人で生きていかなければならない、そのための社会性を身につける場、（学校では）そのような教育であってほしい。

(L委員)

小規模校の教員時代の思い出で、クラスの仲間だけでサッカーをやったかったと言われたことが印象に残っている。（女子を入れたり他学年と一緒にしないと2チーム作れない。）

大規模校では、人数が多くて、日常の様子を掴みきれない子どもが出てきて、成績表に書くことが見つからないということがあった。学年2学級では、保護者に担任を比較される（学年主任のクラスが良かった…）。30人、3クラス程度がいい。子どもが伸びる適正な人数があると感じる。

(M委員)

特別支援の観点から。小中学校では中軽度の障害を持った子どもたちが生活している。このような子どもたちは、大規模校の通常学級での生活が辛い。特別支援学級が安心して生活できる。ところが、同じ障害種の子どもが3人いないと特別支援学級が作れない。分母が大きくないと設置できない。

また、同じ学級になると刺激し合って落ち着かなくなってしまう子どもたちのために、障害種と同じ支援学級を複数作りたい場合も、9人いないと作れない（2学級に分けられない）。市内の学校を見てみると、学年で3学級程度あると一通りの支援学級が作れる。（そのような意味からも）ある程度の規模があると障害に合った支援学級を設置でき、子どもたちにとって安心できる環境を作れる。

(N委員)

中学校の一番の問題は生徒指導であり、子どもとの面接を時間をかけて行い、人間関係を掴んだうえで学級編成する。4月の時点で「（一緒のクラスは）ダメだと言ったのに」「（このクラスは）いやだな」ということのないようにすることが大事。（生徒の意向にも配慮した、柔軟な学級編成が可能になるという意味で）2学級と3学級では全く違う。そこまで取り組んで、生徒たちに人間関係の作り方を学ばせて卒業させることが、中学校では大事だと思う。

中学校では部活動にも重点を置いているが、武道系などの種目では団体戦のチーム（5～6人のチーム）が組めないなど厳しい状況になっている。野球などでは、市外を含めた複数校の合同チームで総体に出たりしている。

(O委員)

学級の人数については、1学級35人を超えると多いと感じる。一方、学級数については、視察だけでは掴めなかった。

教員の研修、授業方法の研究などの視点から。今後、若い教員が増える。若い教員が学年1学級の担任になったら、果たしてちゃんと指導できるのか心配になる。同じ学年に複数の学級があることで、教員同士で授業を練り上げ資質向上ができる。

(P委員)

(地域に子どもが少ないので) 学校で異年齢集団を作らざるを得なくなってきたことを感じた。回数を重ねることで子どもの学校生活に根差していくといい。

中学校を見て、子どもを育てていく中で環境(設備)も重要だと改めて感じた。授業では学びきれないものを、環境(木材を使用するなど)から感じ、学ぶこともあると思う。技術、パソコン等の授業では、地域人材を取り入れた方が豊かな授業になると思った。

部活動を社会教育として位置づけできないか。地域にはレベルの高い指導者がいる。学校の先生におんぶに抱っこではいけない。公民館時代には社会教育主事がいて、地域と文化を繋いでくれた。社会教育の在り方も考えていかなければならない。

学校の規模ではなく、地域に根差してこそ教育力が発揮できる。教育の質を高めることで、いろいろな問題が解決されていくと思う。

(Q委員)

適正配置を考える方向性として3つ。(1) 少人数教育を進める。(2) 学校の環境整備。耐震化を進めることで校舎のリニューアルが遅れたことは市議会としても反省すべきところ。(3) まちづくりをどうするかが見えてこないと学校をどうするかが見えてこない。将来を予測していかないと適正配置に取り組めない。

(R委員)

リニューアルした学校と旧校舎の学校との格差が問題になっている。

学区外の学校へ行く子どもが増えていると聞いている。地域との関係も鑑みながら考えていかなければならない。

(S委員)

経済人としては、成人しても市内に留まっていきたいと思えるように(人口流出を防ぐように)、イベントなどで子どもが活動できる場を提供したり、(日立が) 楽しい場所だと思ってもらうことを考えている。

父親としては、自分の子どもたちはよい教育を受けているのだなと感じた。30人以下の学級では、先生が目が行き届いていると感じた。空き教室の利用などで学級を分けて授業するなどの工夫もできる。中学校ではクオリティの高い授業だった。個々で情報を取得できる時代になった。取得した情報を使ってのコミュニケーションが重要で、その点で、グループワーク、考えさせる授業が素晴らしかった。

子どもが小学校に入学するタイミングで住宅を取得するケースが多い。

どの学校に入りたいかで土地を選ぶ人が多いが、住みたくても住めない状況がある。(例：〇〇地区に住みたいが土地がない、地価が高い→若い人が住めない→子どもが少なくなる) 学校の適正配置という点では、居住できる環境も整えていかないと思惑と違う方向に行ってしまうと思う。

(T委員)

教員、管理職の経験から、25～30人位が適正だと思う。学習指導、生徒指導、教室環境、事務処理などから。40人分の生活ノート、交友関係、家庭環境の把握は、実際に大変だ。

人数が多いと校内のいろいろなところを子どもたちが分担して清掃できた。今は少ない人数で清掃しなければならない状況だ。

(委員長)

視察の感想を皆さんに提出していただいたが、資料1にまとめてあるので合わせて見ていただきたい。

視察に参加できなかった委員からの発言も伺いたい。視察の感想をお聞きになって感じたことなどがあれば、発言してほしい。

(U委員)

感想を聞いていて、小規模、大規模、それぞれのよいところもあると思った。平均化がいいという訳でもないなど。また、統廃合によって小学生が通学できないような遠い距離とならないように、学校の立地も考えていかなければならないと思った。子どもたちには、それぞれの学校を誇りに思ってもらいたい。

パソコンなど新しい教育が出ている中で、通年で使用することのないような特殊な設備を全ての学校に同じように整えることは大変なこともあるので、合理化を進めていくことも方法の一つ。学校間の交流などを進めて、小規模校も大規模校も同じ体験ができるような仕組みも整えてはどうか。

(V委員)

大規模校、小規模校での勤務経験からも、それぞれの良さがあり、課題もあると感じている。学校の適正配置については、子どもたちの健全な育成を念頭に考えていかなければならない。

小規模校では丁寧な指導が可能となるが、多様な考え方に触れながら自分の考えを表現するという学びは難しくなる。クラス替えがないので、友人関係がより深いものになる反面、固定化されてしまうこともあると思う。大規模校ではダイナミックな活動が可能になる。

様々な面を考え、総合的に判断することが大切と感じる。

(W委員)

保護者の立場と大学教員の立場から話したい。

いろいろ文献を読んでいる中で、少人数と大人数とで学力の差はないことが分かった。人数なりの授業の仕方があるのだろうと思う。

学校とは、学習だけする場所ではない。地域性もある。子どもたちに尋ねた研究では、今の学級人数がよいと答える。40人学級の子どもたちを20

人学級にすると、半数程度が「さびしい」と回答した。20人位だとバラエティに乏しくなり、人間関係が膠着したときが難しいと言われている。

スクールバス通学になると、道草を食ったりすることが無くなるが、運動量が減る。それぞれにメリット・デメリットがあり、なにかの形で埋めていくことが必要。最終的に「(何を)これが大事」として決めていくかは、今のところ確信はない。

学生を教育実習に送り出す立場からは、教員数の少ない学校ではモデルが少ない、相談相手がいないということになる。母親の立場からも、子どもたちには担任と合わなくてもほかの先生なら聞いてくれる、来年になってクラス替えができれば、友だちともうまくいくようになると伝えている。ある程度の人数がいると(子どもも教員も)安心できるかなと思う。

大学職員としては、学生の多い学部も少ない学部も仕事の量は同じ。小規模の学校では、職員が少ないので一人一人の仕事の負担が多くなる。

(委員長)

皆様からご意見をいただいた。いろいろな立場での意見があるのだなと共有していきたいと思う。

「義務教育学校」など、説明が必要な事項については、事務局で準備してほしい。

ご質問等がなければ、本日の協議を終了します。

以上